

オプション教材は勉強に余裕があるときに取り組んでいただく教材です。

オプション教材ルピナス 読解マラソン集

ルピナス

読解問題のもとになる長文です。読解問題をやる人は、時間のあるときに読んでおきましょう。

読解問題は、清書の週で時間があまったときにやってください。時間がないときは、やらなくていいです。

読解問題は、選択式問題の解答のコツをつかむために行います。適当に全問やるのではなく、一問か二問でもいいですから確実に正解にするつもりでやってください。

読解問題の答えを作文用紙に書く場合は、問題の番号と答えがわかるように書いてください。書き方は自由です。読解問題の用紙は返却しませんが、選んだ番号と正解は「山のたより」に表示されます。

読解マラソンの問題のページから答えを送信すると、その場で採点結果が表示されます。（この場合、作文用紙に答えを書く必要はありません）

▼作文用紙に答えを書く場合（書き方は自由です。）
作文用紙の余白などに書いても結構です）

▼読解マラソンのページから答えを送信する場合（この場合作文用紙に答えを書く必要はありません）
<http://www.mori7.net/marason/ki.php>

1.

2.

3.

4.

5.

列車に乗ってぼんやりと窓の外を眺めたり、瞑想にふけったりして
いる時間は、私のほとんど唯一といってよい、何物からも開放され
リラックスした時間である。

何度も眺めたことのある同じ風景も、季節や時刻が変わるごとに新
たな味わいを見せ、あるいは過ぎ去った日々へのノスタルジアを、あ
るいはまだ見ぬ場所へのイマジネーションを誘って、飽きることがな
い。身体が座席に縛られて窮屈なのに反比例して、想念の方は、世
の束縛から解き放たれて飛翔し、さまざまな着想が浮かんでく
るのもこのときである。まったく自分自身に帰って、真に心の安まる
自由な時間を過ごすのが、何物にもかえ難い旅の醍醐味の一つなので
ある。

こういうわけで、列車の道中が長いことは私には少しも苦になら
ず、むしろ長いほどありがたいくらいである。(中略)

時として、傍若無人な団体客の喧騒や、携帯ラジオの無遠慮な放声
に悩まされることがあり、また車内アナウンスが親切すぎるという難
点があるとはいえ、列車の中は概して静かで、旅の楽しみを著しく
妨げられることがあまりないのはまずまずありがたい。もしスピー
カーからのべつに観光案内やら、「音楽」やらが流れることにでも
なったら、私の最良の憩いの時間が奪われてしまうことは必定で、想
像するだけでも慄然とする。

ある国鉄の車掌さんが嘆いていた。発車するとすぐに、くどいほ
ど行く先の到着時刻や接続案内などを繰り返すのに、放送を終えて
車内の巡回を始めると、とたんにたった今アナウンスしたばかりの
到着時刻を必ずといってよいほどきかれるので、まったくがっかり
する、と。車掌さんには気の毒だが、私はむしろ当たり前ではない
かと思う。案内放送というものに乗客は慣れつこになつてしまつてい
て、せいぜいバックグラウンド・ノイズとしてしか聞こえていないの
が一般だから。そう言つては申し訳ないが、もっと効き目がないのは
忘れ物の注意で、降りるまぎわまでそわそわしているところへ十年一
日のような放送が流れてきても、それをまとも

につかまえる耳はそうたくさんはないであろう。注意のあるなしにか
かわらず、忘れ物をする時にはするものであることは、私自身の経験
を顧みても、まず間違いないところだと思う。
もともと忘れ物の注意などは各自の責任ですべきことで、忘れ物
をしたからといって、なぜ注意してくれなかったのかと乗務員をなじ
る筋合いのものではないであろう。到着時刻や接続関係にしても、
本来がめいめい調べればよいことである。

ただしそれができない場合に車掌に尋ねることはもちろん差し支
えない。いやそれどころか、そんな時に親切丁寧に教えてくれること
こそ、期待してよいことだと思う。一人ひとりのバラエティーのある
要求には、しよせん応じきれず、また特別に注意を払っていない限り
聞きのがしてしまふ、一律で型にはまつたおしきせ放送よりも、その
方がはるかに乗客の主體的な選択にきめ細かく応じた、本当の意味で
のサービスになり、かてて加えてバックグラウンド・ノイズが小さく
なつて、静けさを望む客にとつてもまた上々のサービスとなるに違
ない。

私は観光バスというものに乗ったことがない。ガイドの絶え間のな
いおしやべりが、バックグラウンド・ノイズとして聞き流す限界を
超えた本格的ノイズであるうえ、ガイドの指図に従つて右や左を向く
ことに虫酸が走る(ガイドに限らず、ガイドづらをするものにはすべ
て同じだが)からである。知りたいことはガイドに聞くよりも、自分
でしかるべく調べた方がよほど確実であるし、別段知りたくないこと
まで教えてくれるのは有難迷惑の気味が大いにある。バスガイドが車
窓から見えたきれいな山の名を覚えてくれなかった、と憤慨している
投書のある新聞で読んだことがある。その時、あんぐりと口をあけ
て、過保護ママが食べ物を入れてくれるのを待っているモヤシつ子
を、私は思わず頭に浮かべた。

観光バスには乗りたくなければ乗らなければよいのだし、ガイドさ
れたり世話をやかれながらの、にぎやかな旅を好む人々の楽しみに、
水をさすつもりもない。しかし一般のバスや列車に関しては、旅の味
わいを人それぞれに任せてくれる、車内放送も発車のベルもない
静かな欧米諸国の旅行風景が、私にはこよなく懐かしい。

(堀淳一 「地図から旅へ」)



いちばん新しい推計によれば、この小さな惑星の表面には、五十億もの人間が群れている。今からそれほど遠い昔ではない石器時代には、地球上における人類の地盤は軟弱なものでしかなかった。それ以来、人類は拡大を続け、今のように災厄のごとく蔓延するまでに人口を増やしてしまった。しかし、人類が地球環境に施してきた変化が、この惑星を人類の居住には適さないものへと急速に変えつつある。われわれは、自らの創意の犠牲者である。その創意は、今でさえばく大な人口をここ四十年以内に倍増させて百億の万台にのせてしまふことだろう。人類は希少種ではない。それなのに、絶滅のおそれのある種なのである。

われわれはまさに、生存の危機に直面している。しかし、そうした事実を隠すことはたやすい。世界にはまだ、すべてが万事うまくいっていると言葉巧みに信じ込ませられるような場所が存在している。たとえばアフリカには、空気が澄みわたって美しく、野生動物はのんびりと歩き回り、かなたには広大な地平線が横たわっているという場所がある。そういう土地を訪れると、自然そのものは安泰であるかのような印象を受ける。見かけとは、あてにならないものなのだ。人間は、かつてそこにあつたものがわずかに二世代あまりで姿を消してしまうほどのスピードで、自然の空気を侵略している。はたしてそういうことが必要なかと、われわれ全員は自らに問いかけるべきである。その破綻は避けがたいものなのか。われわれは、あまりに多くのルールをあつさり破ってきたのではないか。

環境保護論者たちの頭の中は、水質を汚濁し、土地を荒廃させ、大気を汚染する人間の行為に関することでもますますいっばいになりつつある。しかも、人間が自らに対して犯している罪はもう一つある。それは、動物との契約に対する違反である。その契約とは、この地球を共有するうえでのパートナーとなるために人間とそれ以外の動物とのあいだで交わされたものである。

その契約の原則は、個々の種は、他の生物との共存が十分に可能な限度内に自らの個体数増加をとどめなければならないというものである。もちろん生物間の競合は存在する。しかしそれは、一部の

人たちが想像しているような、情け容赦のないものではない。ほかの生物をすべて一掃するほど残酷なしかたで競合するような生物種が収める勝利は、むなしきものでしかない。そうやって支配する土地は荒れ果てた不毛の地にすぎず、不毛の地が生物を養うことはない。そして支配する種として、その例外ではない。

人間以外の動物たちは、お互いどうし結んだ契約になんとしても敬意を払うよううまくやってきた。われわれ人類は、かれらに学ばなければならぬ。もしアフリカの草原にすむライオンが、空腹でもないのにシマウマやアンテロープを手当たりしだいに殺しまくったとしよう。それも、自分は強くて足も速いからしようにと思えばできるからというだけの理由でそうしたとする。そうすれば、獲物はただちに絶滅し、ライオン自身も滅ぶことになる。生物種はみな、互いに依存し合っている。肉食動物には草食動物が必要であり、草食動物には草が必要である。個体数の過密は飢えを意味する。個々の種はみな、個体数が破滅的なレベルを越えるのを防ぐために、独自の個体数調節機構を進化させている。いちばんありふれたやり方は、混みすぎたらメスが繁殖を中止してしまうというもので、卵や胎児の発生が止まった。産んだ子どもを育てられなくなったりするのである。そうすれば個体数は、もう一度繁殖を開始できるレベルにまで減少し、正常な増殖が再開させられる。

(デズモンド・モリス 渡辺政隆訳「動物との契約」)



太古の人類の祖先たちも、ある種の独自の個体数（人口）調節機構をそなえていたはずである。ただし明らかにそれは、人口過密に基づくものではなかった。ごく初期の人類は、百人くらいの小部族で生活していた。狩をして動物の肉を手に入れることが特別の生活手段となっており、暮らすためのスペースが十分にある限りは繁栄していた。たぶん、そこで特別な人口調節システムとして機能していたのは、手に入る食物の量だった。広がって行く先が地球全体である場合には、人口過密は問題とはならず、それが人口調節機構として作用しはじめるということはあるしなかった。

しかし、実際にはそうではなかった。人類の創意による急激な技術革新のせいで、人口爆発が起こってしまった。進化を語るうえでは大海の一滴にも等しい一万年間というわずかな期間で、人類は、石器時代から原子力時代へと進化してしまった。しかも、小集団で暮らしていた頃の遺伝的遺産をそのままひきずってである。食べ物があるなら、好きだけ産んでいいと語りかけたのが、ほかならぬその遺伝的遺産だった。人類が開発した技術が、自分たちがそなえていたそれまでの人口調節機構を無効なものとしてしまったのである。しかも、人口が急増したときに適用することのできる新たな生物学的歯止めを獲得する時間がなかった。

その結果として何が起きたかといえは、人類は地球の略奪をしはじめ、それが進歩だと勘違いしてしまった。適切な進歩を遂げるためには、量よりも質に関心を集中すべきだった。そうすれば、人口は堅実に増加していき、それにとりもなつて生活の質も上昇しただろう。ところが実際に起きたことはといえば、その逆だった。一部の人間の生活の質は昔よりも良くなっているかもしれない。しかし、何百万何千万という人たちにとっては、はるか昔の石器時代、小部族に分かれて豊かな狩猟生活を送っていた頃よりも、日々の暮らし向きは悪くなっている。人口増加の歩調が速くなればなるほど、分け前にあずかる量は悪化していったのである。

自分たちの生息環境に与えた損害は別にしても、世界の支配へとばく進したことで、ヒトという種は、自分たちも動物であり、相互作用し合う生物圏の一部なのだという重大な基本的事実から

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

自らを絶縁してしまった。画期的な発明が行われると、生じうる不都合も考えずに活用してきた。人類がそなえている創意工夫の才は、副作用の検査ができなかった薬品のようなものだった。われわれは、自分たちの体に隠れている原始人を、さまざまな光に満ちた未来の驚くべき遊園地に引きずり出してしまった。自分で自分の目をくらませてしまい、ときには、自分たちは動物などでなくて神なのではないかとまで考えることさえあった。もちろんそうであるとしたら、その聖なる立場に守られたわれわれは自然法則が課す危険を免れただろうに。そうした錯覚が犯した愚行は、少なくともかなりの先進地域の一部ではすでに垣間見られつつある。ある朝目覚めてみたら、地球はとりかえしのつかないほど破壊されていたという悪夢が、われわれの意識の中に浸透しはじめている。どうしてそんなことになってしまったのだろうか。すべては人類がルールを破ったときにはじまったというのが、私から見たその答えである。人類は、その力が動物たちの力を上回るやただちに困ったことに足を踏み入れはじめた。どんどん一方的になってゆく世界を創造しはじめたのである。それは、われわれの偉大な創意をもつてしても制御できないほどの不安定さに満ちた世界である。

（デズモンド・モリス 渡辺政隆訳「動物との契約」）

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34



自分が、いままさに死にゆかんとしていることを知らないままに死んでいく人間などいないと、ぼくは思う。そうでなければ、人間が死ぬ必要などどこにもないではないか。人間は、そのことを思い知るために、死んでいくのだ。有吉の死後、ぼくが読書すら投げ出して考え続けたことは、それだった。だが何のために、そんなことを思い知らなくてはならないのか、ぼくには分からなかった。それを考えるとなぜかぼくは何かに祈りたくなるのだった。有吉が死んでからは、ぼくと草間とは疎遠になった。草間はその猛烈な勉強ぶりに拍車をかけ始めたし、ぼくはぼくで、ある新しい情熱を駆られて小説に読みふけるようになったからだ。その情熱とは、すでにどうの昔にこの世からいなくなつた多くの作家たちが、生きているときに何を書かんとしたのかを知りたいという願望だった。死人が小説を書けるはずなどなかったから、ぼくが捜し出そうとしていたことはばかげたお遊びに近かつた。だが、そのばかげたお遊びは、有吉の死がぼくに与えた後遺症だったのだ。ぼくはまもなく後遺症から立ち直り、あらゆる物語を死から切り離して考えるようになった。すべては死を裏づけにしていたが、死がすべてである物語は存在しなかったからである。

寒い朝、ぼくは草間からの電話で起こされた。「新聞に、あの絵のことが載つてゐるぞ」と草間は言った。ぼくは電話を切らずに、そのままにしたまま、階段を降りて茶の間に行き、父が読んでいる新聞をひたたくつて二階に駆けのぼつた。そして「消えた幻の名画」と見出しがついたコラムに見入った。それは事件としてではなく、ちよつとした町の話題として載せられたもので、ある日忽然と誰かに持ち去られてしまった百号の油絵の由来が紹介され、持ち主の談話が簡単につけ足されていた。喫茶店の店内から絵を盗み出してから、すでに八ヶ月がたつていたから、まさかいま頃になって新聞ざたになろうとは思ひもかけないことだった。作者の島崎久雄は幼い頃からじん臓を患ひ、長い闘病生活の果てに逝つた青年だった。多くのデッサンとペン画が残っているが、油彩の大きな作品としては、盗まれた「星々の悲しみ」のファンも多かったので、何とか手元に帰って来てくれな

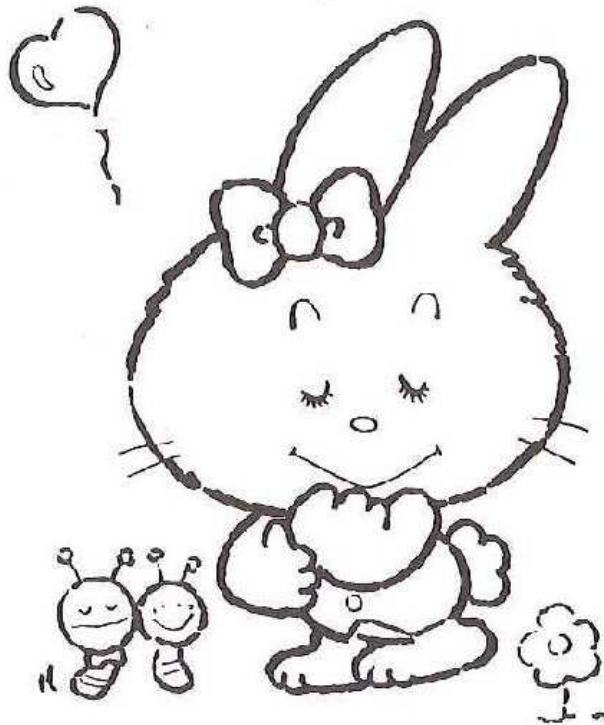
主は語っていた。「用事が済んだら、ちゃんと返しとくのがルールやて言うたやろ。志水がいつまでも返さへんから、こんなことになつたんや」と草間はそれほど慌てている様子もなさそうに言った。警察ざたになつた訳ではなかつたので、ぼくもそんなに動揺はしなかつたが、そろそろ潮時だという気がして、草間に言った。「頼む、絵を返してきてくれよ」「俺一人でか？ アホなこと言うなよ。新聞に載つたとたんにおかしな動き方をしたら余計に危ない。もうちよつと時間をあけてから考えたらええがな」「店の中の、元の壁に返しとくというのは、なんぼ草間でも無理やろなア……」草間の笑い声が、電話口から聞こえてきた。ぼくたちはその話は一応打ち切つて、互いの近況を語り合つた。「もう、へとへとや」草間は言った。「今が一番つらいときや。もうちよつとやないか」それから、ぼくはふいに感傷的になつて、ほんの少しの間涙ぐんだ。……「K大の医学部絶対に通れよ。癌なんかやつつけてしまふ医者になつてくれ」ぼくは二、三日、落ち着かない日を過ごした。「星々の悲しみ」から、出来るだけ遠ざかつていたかつた。だが、そうなるといつときも早く、絵を持ち主に返してしまいたくて仕方がないようになってしまった。ぼくは意を決して、妹の加奈子に新聞の記事を見せた。そして妹に手伝わせて、壁に掛けてある油絵を降ろし、畳の上に立てかけた。そして、八ヶ月前の雨の日、図書館の横の古い橋の上で、初めて草間と有吉の二人と言葉を交わしたときの話を話して聞かせた。「あれから、たつたの八ヶ月やぞ」と言つてしまつてから、ぼくはその間に読んだたくさんさんの小説の行方を思つた。悲劇も喜劇も、悪も善も、恋愛も官能も、心理も行動も、ことごとく陰翳を失つて、ぼくの中に潜り込んでしまつていた。ぼくは何も得なかつたようでもあつたし、積み重なつた透明な後光を体中に巻きつけているようでもあつた。加奈子が自分の部屋に戻つてしまうと、ぼくは古新聞を集めてきて、絵の包装に取りかかつた。乾いたタオルで額についた埃を拭いた。それから、もう二度とぼくの手元に返ってくることはない「星々の悲しみ」を見た。

「凄いなア」死んだ有吉は、この絵を見てつぶやいたのだった。
 「この絵、もつとほかの題がついていたら、何でもないただの絵か
 も知れへんなア」——絵はいつになく光っていた。蛍光灯の光を受け
 て、樹木の葉は水に濡れたように色づき、初夏の陽光は真夏の日差し
 に変わってまばゆく輝いた。どこからか蝉しぐれも聞こえてくるよう
 だった。ぼくは、結局いつかの加奈子の解釈が、いちばん正しかっ
 たのではないかと思った。加奈子は、麦わら帽で顔を覆って大木の下
 でうたたねしている青年を、死んでいるのだと思ったのである。絵の
 作者は、自分の死んでいる姿を描いたのだと。もし本当にそうだとし
 たら、この絵にもつともふさわしい題名は確かに「星々の悲しみ」以
 外ないではないか。ぼくは、葉の繁った大木の下に有吉を横たわら
 せ、そのとてもきれいな死に顔を麦わら帽で隠した。

(宮本輝「星々の悲しみ」)



99 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70 69 68 67



食事を済まし、支度ができたのは一時過ぎだった。K君には私の古洋服、古あみあげを貸し、私とH君とはゴムの長靴をはいた。H君はパンの他にコーヒールを入れた大きな魔法壺を肩にかけた。雪の遠足、子供のころほどには勇みたてなかつた。しかしまだまだ年にしてはこんなことを興ずる方だった。

沼べりの田圃路を行くと雪はもう解けかけ、靴の下でびちゃびちゃ音をたてた。苅り田の切り株に丸く残っていた。

警察分署の横から町を横切り、踏切の方へ行く。S大工の家の前には夏のころ所望したが譲らなかつた「合飲木」がさびしい姿で立っていた。駅員相手に掛け茶屋のような事をしていたから、夏、その下に縁台を出す繁った木を取られては困るのだ。S大工が鬚だらけの達磨顔を当惑さしていたの思い出した。

「夏になると、これがなかなかいいんだ。花もきれいだし」未練がましく、私は木を仰いで過ぎた。

線路を越すと広々とした畑になる。この辺、まだ一面に雪が残っていた。畝なりに波打つ雪の表面から麦がところどころにその葉先を見せていた。やはりいい気持ちだった。私たちは立ち止まった。その時ふと十間ほどうしろにうちの子犬が来ている事に私は気がついた。子犬もそこで立ち止まっている。

「帰れ！」私は大声にいつて追いかえそうとした。子犬は尾を垂れ、わきへ身を隠した。

「歩けないかな」

「歩けない。富勢の植木屋へ回ると三里あるからね」

とにかく、追いかえす事にする。雪をぶつけると尻を丸くして逃げるが、少し行つては立ち止まり、またこつちを見ている。追えば追っただけ逃げて同じ事だった。(中略)

「しかしそんなに馴れないくせについて来るのが変ですね」
「それが変だよ。そうになると、雪の中に置いてきぼりを食わすのも氣持が悪いしね」

「止まってる少し寒くなる」
で、私たちは路へ出て、また歩き出した。そして間もなくそれが近道で、大きな松林の中へ入つて行つた。水気を含んだ雪が時々高い枝から音をたてて、落ちて来た。

松林を出て細い路からいったん田圃路へ降り、さらにグラグラ坂を登つて私たちはある村落へ入つた。村には飼犬がいて、子犬は脅かされ、よく見えなくなつた。その度、私たちは後もどりをしてさがさねばならなかつた。

見つけて、「早く来い」こういうと、子犬は尾を下げたまま臆病にその先を振るが、近づけば逃げた。何者をも決して信じない子犬の態度はいくら子犬でも腹が立つて来た。

「これじゃあ、夜になつても帰れないぜ。どこかで縄をもらつてつないで行こう」

私は農家で一間ほどの藁縄をもらつて来た。しかし、村なかでなく、村を出はずれてから捕まえる事にした。

「何くわぬ顔で先へ行つてくれないか」

私は道ばたの灌木の中に身を隠した。子犬が通り過ぎた所を挟撃するつもりだった。だんだん遠ざかる二人の足音を聞きながら、私は今にも現われる子犬を待ったが、二人が一丁ほど行つてもまだ子犬は現われなかつた。私はそつとのぞいて見た。子犬はそこに立っている。そして私の姿を見ると、すぐ逃げた。

私は子犬が農家の納屋へ逃げ込んだ所をどうとうつかまえた。子犬は夢中になつて、私の手にかみつこうとした。私は上顎と下顎を一緒に握つて、あいた手で縄を首輪へ通した。それから犬の尻を五つ六つ平手で打つてやつた。子犬は鳴き声もたてずに、食いつこうともがいた。癩癩からこつちも殺氣立った。二本に短くなつた縄でつる下げでやると、子犬は齒をむいたまま鮎のように空で跳ねた。

(志賀直哉「雪の遠足」)



米国で耳学問が発達していることを示す例として、よくいわれることだが、米国人は日本人と違って質問する術がうまい、ということがあげられる。うまいのではなく、要するに、わからないことは何でも質問する習慣があるということにほかならない。

わからないことは何でも質問するということで思い出すのは、コロンビア大学にいた頃の私の教え子だ。

その学生の姿を遠くから見かけたら、どんな教授でも避けて通るほど、会ったたびに質問をする学生だった。大学内だけではなく、夜遅くても教授の自宅に電話をかけてきて、一時間余り質問攻めにするという風に、それは徹底していた。(中略)

この学生に典型的な例を見るように、米国では、質問して学ぶ、つまり耳から学ぶ「耳学問」が学問の一法としてまかり通っている。日本人はとかく「いい質問」と「くだらない質問」を分けたり、あるいは、本当は答えはわかっているのに自分の才能とか、発想とかをひけらかすために質問したりする傾向があるようだが、米国人にはそれがない。いい質問とか、くだらない質問とかに頓着しないで、とにかくわからないことは何でも質問し、できれば質問することだけで学びつくしてやろうという姿勢が、米国人全般にあるのだ。

確かに一流大学の学生なら、この耳学問だけで、短期間にかなりのレベルまで学ぶことができる。例えば三、四百ページの本に書かれていることを学ぼうとしている時、学生は教授のところへ行つて、「この本には何が書かれているのですか？」と、日本の大学では考えられないような質問をする。実に幼稚で、おおざっぱな質問であるが、質問された教授はそれに対して懸命になって説明する。するとその説明に対してまた質問を浴びせ、それを何時間かにわたつてくり返しているうちに、その本のエキスの大概を学生はつかんでしまうのだ。大部の書を十ページ読んで、わからなくて放棄するより、まるで目を通さずに質問したほうが、結果としては、格段にいいわけである。もちろん、こまかい点は読まなければならないが、大体のエキスあるいは骨格がつかめていれば、本に対する理解は早い。

私はよく学生との間で経験していることなのだが、日本の学生の場合には質問する時に、「WHY」とか「HOW」という聞き方が非

常に多い。いうまでもなく「WHY」というのは「なぜか」ということなのであるが、これは「真理」(truth)を尋ねているわけである。これに対して米国の学生は「WHAT」という形の質問が非常に多い。「それはいったい何なのか」という聞き方をする。これは「事実」(fact)を聞いているわけである。

要するに日本の学生のほうは、事実の背後にある真理を求めていると解釈できる。「WHY」と問うのは事実だけでは満足できないからだとするのであれば、これはこれで立派なことだと思う。しかし真理などというのは、場合によっては情報がいつの間にか真理と錯覚することもあり、事実も知らないくせに「真理」という言葉をふり回して自己満足に酔っている場合もあり得る。一方、事実をはつきり知ることから出発しなければ危険だ、事実から真理を見抜くのは自分の仕事で他人に聞くものではないという態度もある。どちらがよいかという判断はつきかねるが、ともかく日本でそういう違いがあることを知っておくのもよいだろう。

ところで、こうした耳学問は、単に学問の上ばかりではなく、さまざまな局面で利用される。例えば日本のことを知っていたがっている米国人は、日本について書かれた本を読むより、まず身近な日本人にどんな質問するわけである。私も、周囲の米国人から逐一日本のことを質問されたことがあった。質問されれば、答えなければならぬ。答えなければ、こちらも相手に向かって、それに似たことを質問できないからだ。答えるには、どうしたらいいか。日本とはどういう国か、日本人とはどのような性格をもった国民か、自分で考えたり本を読んだりして、学ばなければならぬのである。教えるためには学ばなければならない。いいかえると、学ぶための方法の一つは、人に教えることにある、ともいえるのだ。

それはともかく、こうした経験をくり返す中で、日本という国の見えない特性、日本人特有の生活感情や思考法などについて私が発見したことは、ずいぶんあった。国際化したこれからの社会では、この耳学問が大いに重要な意味をもっているに違いない。

(広中平祐「生きること学ぶこと」)



目が心の窓だという諺は、旅をする者には一番よくわかる。二十の紹介状、五十の名刺をくばってあるくよりも、さらにはるかに好都合なのは、自分の心の窓のすりガラスでないことと、田舎の心の窓の風通しのよいことである。よく旅から帰って、その地は人氣がよいの悪いのという人も、その確信を証拠だてるまでに、多数の地方人と交渉または取引をしたのではない。やはり口では言い現しえぬ目の交通が、しだいに空な感じと思われぬまでに、強くその印象を与えるからである。電車や汽車の中でもいろいろな眼の光に接するが、それは主として草野を行くような変化の興味である。これに対して村里に入れば、その種類がほぼ揃っているために、いよいよ言語にかわる程度に、濃厚に人を動かすのである。

窓のたとえをなおり返すならば、旅人は別に所在もないために、終始この窓にもたれているのである。その窓前を多数の内部を知らぬ建物動いていく。建物にはおのおのまた窓がある。のぞかずにおられぬではないか。またあちらでも窓の側に立っているらしい。もちろん中で喧嘩をしたり昼寝をしたりしているのもずいぶんあるが、もともどこういう旅人を見るために開けておく窓だから、ちよつとでも利用しようとするのが普通である。全体に口の少ない社会だから、われわれが言語を備えまたは耳を利用するような場合にも、人々は目の窓だけですまそうとする。したがって見るためにも見られるために、語るあたわざることを語らんがために、田舎の目ははるかに有効に用立っているようである。都会の目は多くは疲れている。こちらでは澄んでおるから中の物もよく映るのである。民族性というほどのものではないであろう。

小児には何十回となく、目をもつて商売を問われ行く先を尋ねられ、または手に持つ本やタバコの名をきかれたが、別にそれ以外にそれよりも交渉は淡く、人間としてははるかに有力なる宣言を、今度の旅行にもこの目をもつて二度聞いた。石巻から乗った自動車が、岡の麓の路を曲がって渡波の松林に走り着こうとする時、遠くに人と馬と荷車との一団が、斜めに横たわって休んでいると見た瞬間に、その馬が首を回して車を引いたまま横路に飛び込んだ。小学校を出たばかりかと思う小さな馬方が、綱を手にしたままころ

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

んだとみた時には、もうその車の後の輪が一つ、ちようど腹の上を軋って過ぎた。それでも子供はまっすぐに立って、三足ほど馬を追って振り返ってちよつとこちらを見て、腹を両手で押さえてまた倒れた。反対の側の輪に力が掛かっていたともいい、路面に深くぼみがあつて、あたかもその中に転んでいたからともいつて精確でない。とにかく病院に連れて行かれてその時は助かったが、ただの一瞬間の子供の目の色には、人の一大事に関する無数の疑問と断定とがあつた。その中で自分に問われたように感じたのは、おりもおりこの時刻に、どうしてここを通り合わせるようになったのかという疑問で、それがまた朝からいろいろの手配の狂い、計画の数回の変更が、ちようどこの場へ今われわれの自動車を通らせることになったのを、一種の宿命のようにも取ることできたからである。

中一日おいて次の日には、自分は十五浜からの帰りに、追波川を上ってくる発動機船の上にあった。大雨の小止みの間に、釜谷の部落を見ようとして甲板に立つと曳船を頼むといつて濡れた舟が一つ、岸に繋いである所へ一群の人が下りてくる。石巻の医者へつれて行くチフスの病人と聞いて、事務員が面倒な条件ばかりを出すのを、一々首をもつて承認して釣台を担いで乗ろうとする。年をとった女が二人付いてくる。荷の軽さが子供らしいので、なるべくこの窓だけはのぞくまいとしていたのに、やはりはずみがあつてその子供と目を合わせた。「今昔物語」に鹿の命に代わろうとした聖が、獵人と松明の光で見合わせたという類の遭遇で、ほとんど凡人の発心を催すような目であつた。たぶんは出水の川船の数里の旅行の後、石巻で亡くなつたことと思うが、それは十一、二ばかりの女の子であつた。草の堤をやや下りに、船を見ようとして私を見つけたのである。目の文章は詩人にも訳しえまいが、あるいは自分を医者かと思つて、お医者さんなら遠くへ行かずともすむのにと、考えたらしかつたのが哀れであつた。

(柳田国男「子供の眼」)



66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

そのとき、はじめてお悔やみを言いました。

「お蝶小母さんが亡くなられて、私もさびしくなりました。」
すると、私のまんまえてこちらを向いていた栄作小父さんは、ほんとうに静かな動作で、つうつと横を向いてしまい、そのまま直立の姿勢をくずさないでいるのでした。まわりに同じ村の人たちが四、五人はいたのですが、敏感にその場の気配を察して、私と栄作さんの間の雰囲気をつととしておくために、心をくばったようです。瞬時のことです。

妻をなくして、もうだいぶ月日がたっているのに、夫である栄作さんのつらさが、私に挨拶されて、そんなにも新しくよみがえったことに、まわりの人たちがいたわりを見せたのでした。細身で、どちらかといえば背の高い、農仕事でひきしまったからだ。面長で鼻筋のとおり顔は、陽が照り残っているようなつやを見せています。七十は越しているのに髪も黒く、目も切れ長に黒い。その人が少年のように、口もきけず横を見たまま、まっすぐ遠くをみつめている。たぶんあふれてくるものを見せまいと、背筋を張っていたのに違いありません。その姿は木のように素朴で、悲しみがつつ立つた感じでした。いきなり横を向かれた私にも、すぐそのことが会得されました。私はちつとも困りませんでした。そして黙って立ちました。隣り合わせた一本の木のように。(中略)

横浜での、心のシャッターチャンスがとらえた一枚のスナップについて、これが簡単な説明です。私はこの無形の写真をとくとき、思い浮かべると、どうしてか気持ちがあつとふくらんで、くちびるの辺りがほころびてくる。これをユーモアと名付けてよいものか、どうか。ふだんは礼儀正しい明治の老人が、礼を忘れた姿に、日がたつてからとはいえ、私がかすかなおかしみを味わうとしたら、これは第三者の残酷以外のなものでもないのですが、私にはやはりユーモアと名付けるのがいちばんふさわしく思われます。なめれば甘い、というような単純さで、笑ったからユーモアだ、というのとは別種のもの。

伊豆の、山家の、炭焼きさんの、という、うたうような語り口。なぜかあの村へ行くと、人々のやりとり、会話にリズムがあるのを

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

感じます。一軒の家の囲炉裏に隣近所のひとが寄ってきても話の機知に富んだ軽妙さ。ひとつひとつ覚えておかなかったことが残念ですが、覚えるほどのことではない、また覚えきれることではない日常性が、小川の流れのように、上手に時間を、人と人との間柄をとりもつて運び続けているのかも知れません。それはまちがいに「ことば」の果たす役割でした。遠慮のなさ、気取りのなさ、かなりな冗談。それでいてふつと黙る部分がある。それが動作に出る。

先ごろ田舎に帰ったとき、栄作さんはからだが弱くなつて寝ている、というので、その庭先からたずねると、いまはあるじの息子が出てきて私に言いました。「ハイ(もう)年ですからノ。年に不足はないがです。」いちおう声をひそめているものの、障子越しにつつぬけなのはわかっていて、それを、ハラハラなどしないで聞いている自分に、私は確かにここは岩科だ、と思うのでした。通常、跡とり息子が親に対して、そんな陰口をきいたら、お互いどんなメクジラをたてるだろう? 「年に不足はないがです。」そんなことをサツパリと、他人向けに言ってみせる。息子は充分親孝行で、親は親で、案内された囲炉裏ばたで茶をすすっている私のところへひよつくりあらわれ、きちんと膝をそろえるのでした。「この蜂蜜は、自分のに採ったがです。東京へ持つて下さい。」挨拶や説明はすでに家族がすっかり済ませているのを承知で、栄作小父さんはいきなり四合びんを私のかたわらに置くのでした。透明な器の中で、とろりと濃い蜜が、びんの首まで届いています。

私はまだまだ顔色のいい栄作さんに目をあて、小父さんはいい耳をしていると、つくづく思いました。

(石垣りん「焰に手をかざして」)



66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

私がまだ小学校に行っていた時分に、喜いちちゃんという仲のいい友達があった。喜いちちゃんは当時中町の叔父さんの宅にいたので、その道のりの近くない私のところからは、毎日会いに行くことができなかった。私はおもに自分の方から出かけないで、喜いちちゃんの来るのを家で待っていた。喜いちちゃんはいくら私が行かないでも、きつと向こうから来るにきまつていた。そうしてその来るところは、私の家の長屋を借りて、紙や筆を売る松さんのもとであった。

喜いちちゃんには父母がいなかったが、子供の私には、それがいつこう不思議とも思われなかった。おそらく訊いてみたこともなかったろう。したがって喜いちちゃんがなぜ松さんのところへ来るのか、その訳さえも知らずにいた。これはずつとあとで聞いた話であるが、この喜いちちゃんのお父さんというのは、昔銀座の役人か何かをしていた時、贖金を造ったとかいう嫌疑を受けて、入牢したまま死んでしまったのだという。それであとに残された細君が、喜いちちゃんを先夫の家へ置いたなり、松さんのところへ再縁したのだから、喜いちちゃんがときどき生みの母に会いに来るのは当たり前の話であった。

なんにも知らない私は、この事情を聞いた時ですら、べつだん変な感じも起こさなかったくらいだから、喜いちちゃんとふざけ廻って遊ぶ頃に、彼の境遇など考えたことはただの一度もなかった。

喜いちちゃんも私も漢字が好きだったので、わかりもしないくせに、よく文章の議論などをして面白がった。彼はどこから聴いてくるのか、調べてくるのか、よく難しい漢籍の名前などを挙げて、私を驚かすことが多かった。

彼はある日私の部屋同様になつてゐる玄関に上がり込んで、懐から二冊つづきの書物を出して見せた。それは確かに写本であった。しかも漢文で綴つてあつたように思う。私は喜いちちゃんから、その書物を受け取って、無意味にそこを引っくり返して見ていた。実は何が何だか私にはさっぱりわからなかったのである。しかし喜いちちゃんは、それを知つてゐるかなどと露骨なことを言うたちではなかった。

「これは大田南畝の自筆なんだがね。僕の友だちがそれを売りたい

というので君に見せに来たんだが、買ってやらないか」

私は大田南畝という人を知らなかった。

「大田南畝つていつたいなんだい」

「蜀山人のことさ。有名な蜀山人さ」

無学な私は蜀山人という名前さえまだ知らなかった。しかし喜いちちゃんにそういうわれてみると、何だか貴重の書物らしい気がした。

「いくらなら売るとかい」と訊いてみた。

「五十銭に売りたいというんだがね。どうだろう」

私は考えた。そうして何しろ値切つてみるのが上策だと思いついた。

「二十五銭なら買つてもいい」

「それじゃ二十五銭でも構わないから、買つてやりたまえ」

喜いちちゃんはこういつつ私から二十五銭受け取つておいて、またしきりにその本の効能を並べ立てた。私には無論その書物がわからないのだから、それほど嬉しくもなかったけれども、何しろ損はしないのだらうというだけの満足はあつた。私はその夜「南畝莠言」——たしかそんな名前だと記憶しているが、それを机の上に載せて寝た。

(夏目漱石「硝子戸の中」)



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

あくる日になると、喜いちちゃんがまたぶらりとやって来た。

「君昨日買ってもらった本のことだね」

喜いちちゃんはそれだけいって、私の顔を見ながらぐずぐずしている。

私は机の上に載せてあった書物に眼を注いだ。

「あの本かい。あの本がどうかしたのかい」

「実はあすこのおやじに知れたものだから、おやじがたいへん怒って

ね。どうか返してもらって来てくれって僕に頼むんだよ。僕も一ぺん

君に渡したもんだからいやだったけれども仕方ないからまた来たの

さ」

「本を取りにかい」

「取りにってわけでもないけれども、もし君の方でさしつかえがない

なら、返してやってくれないか。なにしろ二十五銭じゃ安すぎるって

いうんだから」

この最後の一言で、私は今まで安く買い得たという満足の裏に、ぼ

んやり潜んでいた不快、——不善の行為から起こる不快——をはつき

り自覚しはじめた。そうして一方ではずるい私を怒るとともに、一方

では二十五銭で売った先方を怒った。どうしてこの二つの怒りを同時

に和らげたものだろう。私は苦い顔をしてしばらく黙っていた。

私のこの心理状態は、今の私が子供の時の自分を回顧して解剖する

のだから、比較的明瞭に描き出されるようなものの、その場合の私

はほとんどわからなかった。私さえただ苦い顔をしたという結果だけ

しか自覚し得なかったのだから、相手の喜いちちゃんには無論それ以上

わかるはずがなかった。括弧の中でいふべきことかもしれないが、

年齢を取った今日でも、私にはよくこんな現象が起こってくる。それ

でよく他から誤解される。

喜いちちゃんは私の顔を見て、「二十五銭では本当に安すぎるんだと

さ」と言った。

私はいきなり机の上に載せておいた書物を取って、喜いちちゃんの前

に突き出した。

「じゃ返そう」

「どうも失敬した。なにしろ安公の持つてるものでないんだから仕

方がない。おやじの宅に昔からあったやつを、そつと売って小遣いに

しようっていうんだからね」

私はぷりぷりしてなんとも答えなかった。喜いちちゃんは袂から二

十五銭出して私の前へ置きかけたが、私はそれに手を触れようとし

なかった。

「その金なら取らないよ」

「なぜ」

「なぜでも取らない」

「そうか。しかしつまらないじゃないか、ただ本だけ返すのは。本を

返すくらいなら二十五銭も取りたまいな」

私はたまらなくなつた。

「本は僕のものだよ。いったん買った以上は僕のものにきまつて

じゃないか」

「そりやそうに違いない。違いないが向こうの宅でも困ってるんだか

ら」

「だから返すと言ってるじゃないか。だけど僕は金を取る訳がないん

だ」

「そんなわからないことを言わずに、まあ取っておきたまいな」

「僕はやるんだよ。僕の本だけでも、欲しければやろうというんだ

よ。やるんだから本だけ持つてたらいいじゃないか」

「そうかそんなら、そうしよう」

喜いちちゃんは、とうとう本だけ持つて帰った。そうして私は何の意

味なしに二十五銭の小遣いを取られてしまったのである。

(夏目漱石「硝子戸の中」)



もうその頃、僕は尺八の美しさをよく知っていた。祖母の家に訪ねてくる尺八の名人がいて、その朗々とした響きは今もって忘れない。

正座して尺八を構え、目を半眼に開く——これは子供心に抵抗を感じたが——そうして首を振りながら、生まれるビブラートは、まず腹の底に響くといった豊かさがあつた。

だが一体、目を半眼に開くということはどういうことだろう。フルートは目を開いて吹く。その目は楽譜を見たり指揮者を見たりという具合で、目をつむって吹いたにしても例外的なことだろう。いわば前を見ながら後を見、信号や標識に目を配る運転手の目のように働いている。

しかし尺八の奏者はまさに無念無想の構えである。そしてこの構えは、琴や三絃と合奏するときにも破られようとは思えない。いずれも音に集中する態度に相違ないが、フルートが全体の流れを追って集中していくのに対して、尺八は鳴っているその一つ一つの音への投入を前提とするようにみえる。たしかにフルートと同様、尺八も微妙な音の運動を行うが、フルートがつねに到達しようとする音度を指向して運動する性質をもっているのに対し、尺八の運動は、音に没入するその感極まつたあぐくの表情か、あるいは寺男が余韻の消え去る頃合いを見計らって次の鐘を打つ、その感情に似て、新しい音に没入するまえの戦慄を表すもののように響くのである。

いうまでもなく、楽器はすべて響きの工夫を伴っている。音はそれによつて光彩を放ち、楽音として完成する。このことに尺八もフルートも異なるところはないが、しかしフルートは絶えず改良を施されてきた。はじめは尺八と同様縦笛だったそうだが、響きの合理性から横笛に変わった。そして、指のおさえもただくり抜かれただけの穴から鍵にかわり、それがまた改良に改良を加えられて今日の楽器に至つたのである。

けれども尺八には一体どういう改良が行われたのだろう。もちろん工夫はあつたに相違あるまいが、しかしつくられた昔から今日ま

でそのままの形で生きつづけてきたといった方が似つかわしい格好である。

それにしても尺八は音の禅ということはどういうことだろう。あまりこだわってもなるまいが、何となく気にかかつて過ぎているうちに、鈴木大拙の本の中で次のような説話に出会った。

真理がどんなものであれ、禅とは身をもつて体験することであり、知的作用や体系的な学説に訴えぬことである、と、大拙はつけ加えている。

なるほど、日本の音楽は知的作用を隔絶した世界である。ヨーロッパの音楽は、記譜法を確立するとともに、理論的体系を積み重ねながら調的な力を追求してきた。もつとも、そのあぐく現代に至つて遂に調破壊の激越な意識を生むに至るのだが、それはともかく、日本の音楽はそのようなドラマとは無縁のことであつた。すなわち、ヨーロッパの音楽は調的な力の把握に知的作用の援けを借りたが、日本の音楽は、調性をひたすら体験的なものとして感じ、伝承してきたのである。上述の説法を借りれば、ヨーロッパの音楽は、起こり得るあらゆる危険を分析して対策を講じてから行動する夜盗に似、日本の音楽は説話そのままの夜盗に似ているということになる。

いいかえれば、ヨーロッパの音楽は客観的、日本の音楽は主観的性格を持つということになる。もしベートーベンが音ではなく光を失っていたとしたら音楽は書けなかった。けれども古来日本の音楽家には盲人が少なくない。そういう日本ではもつぱら、耳づて、口づてで音楽が伝承されてきた。当然、耳や勘が働けば目をつむつていてもかわぬわけで、いやむしろ、目をつむつた方が耳や勘の集中にかえつて具合がいいということになるだろう。尺八奏者の目もこの関係を物語っているが、これはまた、体験的な音の世界のありようを暗黙のうちに物語っている。

（小倉朗「日本の耳」）



われわれ普通の凡俗にとっては、情報の節食、ないしコントロールということはむずかしい。実際「遠くへ行きたい」と言うので、山に登ったりする若者たちも、テントの中で、必ずラジオを聞いている。もちろん、山の天気は変わりやすく、したがって、天気予報を聞くためにラジオは必需品だ、と若者たちは抗弁する。しかし、これらのテントに近づいて耳を傾ければ、かれらは例外なくディスク・ジョッキーなどを聞いているのである。いや、天気予報だって、昔の登山家は、自分の過去の経験によって見通しを立てた。今日の大衆登山は、その意味では情報登山とも呼ばれるのがふさわしい。

どうしても情報の洪水の中で生きるより仕方がないのであるとするならば、そこでわれわれには、いったい何ができるのであろうか。

一つの可能性は「体験」の世界を大切に見直してみることである。人間は、みずからの経験の中に、他人の経験を取り入れることができる。われわれの「想像力」は、他人のどんな経験にも乗り移り、どこにでも自由に動いてゆくことができるのだ。われわれのシンボルの経験の世界は、いくらでも、広がってゆく。しかし、シンボルの経験が広がる、ということは、しばしば人間の現実と直接的なかわりをおろそかにさせる。もちろん、「現実」というもの自体も、シンボルのであり、人間の精神機能を抜きにして考えることはできない。しかし、たとえば、「花」という言葉を使って、花について考えたり語ったりすることよりも、われわれが「花」という言葉によって指し示している実在の植物を自分の手に取って、そのにおいをかいでみる、という行為のほうが、情報行動として、よりシンボル性が少なく、より実在の世界に近づいている、と言えるだろう。そうした、実在の世界との距離をせめることを、われわれはときどき試みる必要があるのではないか。(中略)

われわれの情報活動のなかでは、しばしばイメージ、あるいは観念を尺度にして現実を評価する、という逆転した思考方法が定着してしまっている。「体験」という名の情報に、より大きな価値を与える習慣をつけなければ、この逆転を正常な姿に引き戻すことはできない。たとえば、旅行案内に書かれていることと、自分がその現地で体験したことの間に食い違いがあるとすれば、その場合、まちがっているのは、明らかに情報のほうなのである。自分の体験が

尺度になつて、その尺度によつて情報が評価されて、はじめて、人間と環境とのかわりかは、正しい姿になるのだ。それを逆転させているかぎり、われわれの情報活動は根なし草のごときものであり続けるだろう。

実際、こんなふうに情報圧力が激しくなってくると、われわれは情報のとりにこになり、押し流されることになりかねない。自分の持っている意見が、新聞などに載っている社会の大多数の意見と食い違っているときには、なんとなく不安になつて、自分の意見を捨ててなくなつたりもする。周りがみんな、そうだ、そうだ、と叫んでいるときに、ひとりだけ、ちがう、と発言することは、たいへんな勇気のいる作業なのである。

それを押し返すためには、それぞれの人間がなにがしかの「体験」を蓄積することこそが大事なのである。自分は、この目で確かに見た、この耳で確かに聞いた、と確信をもつて言えることがらが、もつとたくさんあつてよい。もちろん、体験というものは、かなり主観的なものであつて、偏りもあるだろう。しかし、それぞれの人間の個性というのは、結局のところ、そうした偏りのことなのである。偏りを恐れて、個性的で確かな人生など、構築しうるはずがないではないか。

(加藤秀俊「情報行動」)



読解問題 10月4週分

問1 読解マラソン集1番「列車に乗って」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 列車の社内アナウンスは必要最小限にして、あとは音楽などを流すだけにすればよい

B 忘れ物の注意などの放送は、聞き慣れているので、あまり効果がない

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集1番「列車に乗って」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 一律の車内放送は、静けさを望む乗客にとっては迷惑である

B ガイドが山の名前を覚えてくれなかったと憤慨する投書は、過保護な要求をしている

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集2番「いちばん新しい推計によれば」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 地球には、まだ人間と自然がうまく共存している場所がある

B 人間は、手当たり次第に、自分たち以外の生き物を減ぼしてきた

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集2番「いちばん新しい推計によれば」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 動物どうしの契約とは、他の生物と共存できる範囲に自らの個体数をとどめるということである

B 個体数を調整するためのいちばんありふれたやり方は、増えすぎた個体が別の場所に移動することである

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集3番「太古の人類の祖先たちも」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 太古の人類の人口調節システムは、手に入る食物の量だった

B 人類は、もともと人工を調節する機構を持っていない生物だった

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集3番「太古の人類の祖先たちも」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 人類は、豊かな狩猟生活を送っていたころの方が幸せだった

B 人間が、量よりも質に関心を集中すれば、生活の質はもっと向上したはずだ

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集4番「自分が、いままさに」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 喫茶店の店内から絵が盗み出されたあとハヶ月もたってから警察に取り上げられた

B ぼくは、自分たちの盗んだ絵のことが新聞に載っていたので、心から動揺した

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集4番「自分が、いままさに」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A ぼくは、盗んだ絵を持ち主に返して警察に届けようと思った

B ぼくは、絵の中に描かれている青年に、有吉の姿を投影して見た

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

読解問題 11月4週分

問1 読解マラソン集5番「食事を済まし」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 「未練がましく、私は木を仰いで過ぎた」と書いてあるのは、私とその木をほしがったのにもらえなかったからである

B 私たちは遠くまで行くので、その犬を最後までつれてはいけなかったと思った

I A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集5番「食事を済まし」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A その日はときどき雪の降る寒い日だった

B 「何くわぬ顔で先へ行ってくれないか」と私が言ったのは、犬に感づかせないためである

I A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集6番「米国で耳学問が」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 日本人の学生の質問の方が、米国人の学生の質問よりもレベルが高いことが多い

B 自分で本を読むよりも、目を通さずに質問した方が、結果としては格段にいい

I A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集6番「米国で耳学問が」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 日本の学生は真理を尋ねる聞き方が多く、米国の学生は事実を尋ねる聞き方が多い

B 耳学問で質問を受けると、こちらも耳学問で学ばなければならないので自分の勉強になる

I A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集7番「目が心の窓だという諺は」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 「旅人は所在もないために、終始この窓にもたれている」というのは、旅人が周りを眺めているということである

B 「内部を知らぬ建物が動いていく」というのは、旅でいろいろな建物を見るということである

I A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集7番「目が心の窓だという諺は」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 私は、荷車の後輪にひかれた子と知り合いだった

B 私は昔、医者だったことがある。

I A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集8番「そのとき、はじめて」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 私がお悔やみを言ったとき、栄作小父さんが横を向いてしまったので、私はどうしていいかわからなくなった

B 私は、栄作小父さんが礼儀も忘れて横を向いたことを思い出すと、今でもおかしみを感じる

I A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集8番「そのとき、はじめて」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A その村では、人々は言葉はあまりかわさず、もっぱら心と心でやりとりをしていた

B 「年に不足はない」という言葉を聞いて、私は小父さんがその会話を聞いているのではないかと心配になった

I A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

読解問題 12月4週分

問1 読解マラソン集9番「私がまだ小学校にいていた時分に」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 喜いちゃんという仲のいい友達の家庭環境を私はよく知っていた。
B 私は、喜いちゃんから大田南畝の本を喜んで譲ってもらった。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集9番「私がまだ小学校にいていた時分に」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 私は、喜いちゃんから値切って本を買い満足した。
B 喜いちゃんのお母さんは、私の家族と再婚した。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集10番「あくる朝になると」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 私は、本を安く買った自分と安く売った喜いちゃんに腹をたてていた。
B 私は、買った本を無料であげてしまった。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集10番「あくる朝になると」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 喜いちゃんは、私の怒りの心境をよく理解していた。
B 喜いちゃんは、売った本を返してもらうことを気まづく思いながらやってきた。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集11番「もうその頃、僕は」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 日本の音楽は、調整の体験的な伝承によって成り立つ知的作用とは隔絶した世界である。
B フルートは改良を重ね出来上がってきた楽器だが、尺八は昔からの形をかえていないといえる。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集11番「もうその頃、僕は」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 日本の音楽は、記譜法を重視してきた。
B 日本の音楽は、演奏時に目をつむってもつむらなくても耳や勤の集中には特に関係しない。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集12番「われわれ普通の凡俗にとっては」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 体験を蓄積することにより、情報を評価することができる。
B 偏りのある体験ばかりでは、個性的で確かな人生を組み立てていくことができない。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集12番「われわれ普通の凡俗にとっては」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 社会科学は発達には、情報の蓄積が不可欠である。
B 情報圧力に耐えうるためには、体験の蓄積が不可欠である。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

10～12月

小1 コード： nane パ ス： PDF	小2 コード： nane パ ス： PDF	小3 コード： nane パ ス： PDF
小4 コード： nane パ ス： PDF	小5 コード： nane パ ス： PDF	小6 コード： nane パ ス： PDF
中1 コード： nane パ ス： PDF	中2 コード： nane パ ス： PDF	中3 コード： nane パ ス： PDF
高1 コード： nane パ ス： PDF	高2 コード： nane パ ス： PDF	高3 コード： nane パ ス： PDF